

黎明館所蔵「奄美史談」(写本)をめぐる一考察

―特に「南島雑話」との関わりを中心に―

内倉昭文

はじめに

平成十五年度は奄美群島日本復帰五十周年ということで、県内各地はもとより県外においても、多くの関連する記念事業が開催されたことは、まだ記憶に新しいところである。

この年黎明館でも、「描かれた奄美」と題した記念企画展を開催している(四月二十二日～七月二十一日)。その企画展の第一部「文字に記された奄美」のコーナーにおいて、黎明館所蔵の「奄美史談」(写本)の展示を行った。

企画展の際には本史料の精査に十分な時間がとれず、その後そのままになってしまっていたが、今回『黎明館調査研究報告 第十八集』の発刊に際して、最近行った本史料の精査の結果に基づき、改めて本史料について紹介を行いたい。また、同企画展ではいわゆる「南島雑話」(鹿児島県立図書館及び鹿児島大学附属図書館所蔵)も数点展示を行った。

この「南島雑話」に関しては、従来の「著者は名越左源太である」という「定説」を一部修正しなければならないような新しい研究成果が、最近報告されている。

この「南島雑話」と「奄美史談」との関係の深さについては、従来から度々指摘されている。本稿ではこの点を踏まえて、両者の成立の背景等に関しても少しばかり考察を行ってみたい。そのことが、本格的な奄

美の歴史研究が開始される明治期の様相を、いくらかでも解明する手助けになるのではないかと期待してのことでもある。その目的が僅かばかりでも果たせたなら幸いである。

「奄美史談」について

1 「奄美史談」とは何か

「奄美史談」については、原口虎雄氏が『奄美史談・徳之島事情』の巻頭「解題」(註3参照)の中で紹介されているので、少々長くなるが、その部分を引用してみる。

「奄美史談」「南島語及文学」は、奄美大島研究のバイブルである。著者は南峰都成植義氏、慶應二年一月二十四日今の名瀬市金久に生れ、大正三年八月四十九才、名瀬村長として逝去された。稀にみる学徳の高い人で、奄美の将来の参考に供せんとて、公務繁忙の間に執筆せられたのが本玉稿である。その甥が永井亀彦・同竜一の両先生で、竜一氏(視学)の手によって公刊された。ガリ版・和紙・袋とじ。九十七枚の布製和本で、昭和八年九月廿五日の発行になっている。

竜一氏も云わるるように、「未定稿をそのまま僅かに魯魚の誤を訂したるのみにて公にする」ことは、都成先生の「在天の靈、果して喜ばるるや否や。」という点について甚だ恐縮に存ずる。しかしながら「鹿児

「奄美史」を始めとして、「奄美大島史」(坂口徳太郎 大正十年刊)・「奄美大島の糖業」(鳥原重夫 大正十年刊)・「奄美大島における家人の研究」(市史資料第二集所収)・「封建治下における奄美大島の農業」(前回)・「奄美史」(昇曙夢)など、およそ奄美大島の研究上において著名な研究は、すべて都成先生の「奄美史談」・「南島語及文学」に基礎をおいている。この厳たる事實は、永井氏公刊の以前からのことであつて、如何に都成先生の草稿が南島史研究の基礎として珍重せられていたかを示すものである。」

もちろん同氏が同じ「解題」の中で触れておられるように、時代的・地理的な制約等から来る限界が一部見受けられるにしても、同氏が別途「南島雑話 解題」の中で、「(前略) 都成植義氏の草稿本『奄美史談・南島語及文学』は、島人自身の手になる最初で最良の一種の『南島雑話』である。」と最大級の讃辞を贈られているのは、概ね妥当な評価であると云えるのではないだろうか。

2 「奄美史談」の写本等の所在状況について

現在我々が「奄美史談」の内容を調べる場合に、最も一般的で手にしやすいものは、既に何度も触れている昭和三十九(一九六四)年名瀬市史編纂委員会から発刊された『奄美史談・徳之島事情』であろう。これは、その「編輯後記」の中で述べられているように、基本的に昭和八年に永井龍一氏がガリ版刷りで公刊されたものを「翻刻」したものである。一方鹿兒島県立図書館に『大島史料集 第一輯(奄美史談)』という冊子(以下「鹿兒島県立図書館所蔵本」と略す)があり、(全てを逐一照らし合わせたわけではないが)挿絵等がないだけで、その構成や記述内容は基本的に永井龍一氏の公刊本と同一である。またこの冊子もガリ

版刷りと思われるものであるが、しかし永井龍一氏のそれとは異筆のようである。その筆者はわからないが、その巻末にペン書とスタンプで「兼子鎮雄寄贈」とあり、さらにその下に「大正十五年六月一日 寄贈」との鹿兒島県立図書館のスタンプが押してある。この本の刊行状況等詳細は不明であるが、大正十五年というのは永井龍一氏の刊行より7年程古い。なお、「兼子鎮雄」という人物は、ひよつとすると同名の戦前から戦後まもなくの頃にかけての教育学・教育史等の研究者と同一人物かとも思われるが、確証はない。

その他に、鹿兒島大学附属中央図書館に「奄美史談」との表題がついた和綴本の写本(以下「鹿兒島大学附属図書館所蔵本」と略す。なお、「南島雑話」でもこの呼称を用いる場合があり、この論考でも使用している)、「奄美史談」のそれと区別されたい)が存在する。その内容は、これもまた時間等の関係で逐一照らし合わせたわけではないが、絵が省略されているだけで内容は概ね永井龍一氏刊本と一致するようである。またその巻末には、「在大島農學校得業生瀨田静氏の周旋によりて謄写せしむ 大正四年九月 小出教授」とある。小出教授とは、おそらく大正五年に「南島雑話」(いわゆる大島島庁本)の筆写を行い、かつそれらの資料(群)を「南島雑話」と名付けた小出満二氏ではないだろうか。であるとすると、ここで一つ注目したいのは、小出氏が「南島雑話」に先だつて「奄美史談」を「謄写」したという点である。もちろんたまたま「南島雑話」より先に「奄美史談」の拝借が実現しただけであるという可能性を完全には排除できないが、当時の研究者の「奄美史談」に対する評価の一端が窺われておもしろい。

以上述べた以外にも、(本館所蔵の写本を除いて)写本(刊本)が以

前存在したことは明かであるが、現存するものの確認は私自身行っていない。

一方、「奄美史談」の「原本」(おそらく都成氏自筆の草稿本)の方はいかがであろうか。

これについては、まず「奄美史談」巻頭の昇曙夢氏による「序」の一部を引用したい。

「故都成南峰先生に私が初めてお目にかかったのは、何しろ古いことではつきり記憶していないが、多分明治三十六年、私が神学校を卒業した年の夏か、或はその前後であったと思ふ。(中略)その時先生の南島史は既に脱稿していたので、先生はこの貴重な原稿を初対面の私に喜んで貸与されたのである。帰京後私はこの稿本を拝読して啓発されるどころが多かったので、御返しする時に弟に命じて写し取っておいたのが、今猶ほ私の手許に残っている。」⁽¹⁰⁾

また、同書の永井龍一氏自身による寄稿文「南峰先生の遺稿刊行について」には、「明治四十二、三年の頃、都成先生は大島方言の発音表示についての研究からして奄美史談の原稿を示されたことがあったので、序でに之を数日間借覧して初めてわが郷土の過去に関する知見を贏ち得たのである。(中略)一、二年を過す間に南峰先生は名瀬にて突然病没せられたのであるが、(中略)やがて代は大正に入り、五年の夏また大島に復り、古仁屋・名瀬と転々する間に郷土史料の蒐集を試み、幸にして奄美史談の遺稿の保存せられたるを聞いてこれを借りたのであるが、大正八年の春古仁屋小学校に置き忘れて名瀬の小学校に赴任し、後日奄美大島築城支部よりその写本を公にせられしに氣附きて偶然思ひだし、遽てて原本を古仁屋より取り返し、遺族に納めて粗忽を陳謝したことも

ある。」とある。

以上のような状況からも、昭和八年に永井氏が「奄美史談」(「南島語及文学」も含む)を刊行した時には、「奄美史談」の「原本」が存在し、永井氏が直接その「原本」を基に刊行したものと考えるのが自然なことであろう。

では、その「原本」は現存しているのであるか。これについては残念ながら、現時点で私自身何らの情報も得ていない。御子孫の方の手許にある可能性も十分考えられるのであるが……。

3 黎明館所蔵「奄美史談」(写本)について

黎明館が所蔵する「奄美史談」(写本)(書名は「奄美史談 全」となっている。以下「黎明館所蔵本」と略す)は、三年ほど前に県外のある古書店から購入したものである。そのため、それ以前の由来(経緯)等の追跡調査が難しい。しかしながらその巻末に手掛りとなる書き込みがある。

それによると、この写本は都成植義氏の原稿を、石井達宗氏が明治二十九年に第七十九国立銀行大島支店にて書き写したものである。⁽¹¹⁾

ここで書写が行われた「明治二十九年」という年代について少し考察してみたい。まず第一に、これは「奄美史談」の成立時期とも関わる重要な部分であると考えられるからである。

「奄美史談」原稿の成立時期については、原口虎雄氏が前掲の「奄美史談・徳之島事情」の「解題」の中で、「これは明治三十六年頃の原稿である」と述べられている。同氏は直接その典拠を示されていないので詳細はわからないが、都成植義氏自身の「緒言」には、「明治三十三年仲秋月下ニテ 著者 謹誌」とある。また、前項で紹介した昇曙夢氏の

「序」では、「多分明治三十六年頃」その原稿を昇氏が手にしたとなっている。一方永井氏自身は、同じく前項で紹介した永井龍一氏の「南峰先生の遺稿刊行について」によると、少し遅れて「明治四十二、三年の頃」借覧したことがわかる。

前掲「黎明館所蔵本」の内容と永井龍一氏公刊本の内容を比較してみた場合に、巻頭の一部や章名及び章立て、添付・挿入された絵及び絵図などに大きな差異が見られるが、主要部分の記述には全く同じかほとんど似通った部分も少なくない。明治二十九年という書写の年代は、私の知る限りでは、もちろん刊本も含めて最古である。

一方（順番が逆になってしまったかも知れないが）、その巻頭に、これもまた非常に注目すべき記載が見られる。それは都成植義氏の「奄美史談」に寄せられた二ページにわたる「叙」で、その末尾には「明治廿五年十月 大海原尚義 撰」とある。ここで「大海原尚義」氏とは、「大島代官記」（福岡大学研究所資料叢書第一冊『道之島代官記集成』1969年、所収）や『笠利町誌』（笠利町誌執筆委員会編、一九七三年）等によると、明治二十三年五月から、明治二十七年九月に笹森儀助氏が就任するまで島司を勤めた人と同一人物ではないだろうか。この「叙」がある程度以上の完成原稿を受けてのものであるとするならば、既に「奄美史談」は明治廿五年十月の段階で一応成立していたことになる（さらに同本の巻頭の都成氏自身の「緒言」には、「明治二十四年十一月 南峰學人 都成植義 誌」とある）。

以上のことから、「奄美史談」の原稿の主要な内容は、少なくとも明治二十年代に固まりつつあった、そしてそれがその後の修正を加えながら明治三十年代前半頃に、都成氏自身の中で現在の形に「確定稿」と

なっていたと言えるのではなからうか。

少し話がそれるが、「南島雑話」を木脇啓四郎が写し終わった（即ちいわゆる「大島島序本」が成立した）のが明治二十二年六月であること⁽¹⁾を考えるならば、明治二十年代半ばという時期は、ようやく本格的に奄美の歴史や文化に対する研究がスタートしたと言える時期なのではないだろうか。そして都成氏が「奄美史談」作成の資料調査・研究等を精力的に推進されたのも、まさしくこの時期であったのである⁽²⁾。

このような状況下において、「南島雑話」と「奄美史談」が何らかの関わりを持ったとしても、少しも不思議ではない。大海原島司と都成氏との係わりが確認されることで、「南島雑話」のうち少なくとも「大島島序本」との接点は、なおさらであると言えるのかも知れない。そこで次のところでは、この両者の関わりについて見てみたい。

（参考）「奄美史談」写本・刊本について（写本については現時点で筆者が確認したもの、各々の呼称は便宜上付けたもの）

- ① 「黎明館所蔵本」（写本）
明治二十九年三月、石井達宗氏が書写。
- ② 「鹿児島大学附属図書館所蔵本」（写本）
大正四年九月、小出教授が謄写。
- ③ 「鹿児島県立図書館所蔵本」（刊本？）
ガリ版にて刊行（？）。大正十五年六月一日に兼子鎮雄氏が寄贈したことがわかるスタンプ等あり。
- ④ 「永井龍一氏刊本」
昭和八年九月、永井龍一氏が「南島語及文学」と共にガリ版

刷りで出版（自費）。

⑤「名瀬市史編纂委員会刊本」

昭和三十九年三月、名瀬市史編纂委員会より刊行されたもの。原口虎雄氏らが中心となり、永井龍一氏刊本を底本に、新たに「徳之島事情」を加えて『奄美史談・徳之島事情』の書名で出版。

黎明館所蔵「奄美史談」(写本)から見た「南島雑話」考

1 「南島画譜」とは何か。

いわゆる「永井龍一氏公刊本」及び前掲の『奄美史談・徳之島事情』の中に、注目すべき記述がある。それは、複数箇所見られる「南島画譜」という典拠を示す部分である。では一体「南島画譜」とは何か。

その手掛りの一つは、戦前の代表的な奄美史研究書である坂口徳太郎氏の『奄美大島史』(三州堂書店、大正十年)の中にある。それは、巻頭の「奄美大島史研究主要参考書類」のところで、「南島雑話」(大島竊覽・南島画譜・此書中にあり)と記載されているところである。これによると、「南島画譜」は「南島雑話」を構成する一部分であることがわかる(もちろん、筆者や成立時期の違い等から、都成氏の言う「南島画譜」と坂口氏の言うそれとが一致しない可能性も考えられるが、ここではその可能性の高さから敢えて両者が一致すると仮定して、以下論を進めたい)。

次に、実際に前述の「奄美史談」で出典を「南島画譜」としてるところを見てみたい。

例えば、前掲「奄美史談」の「第一章 上古」の本文中「復開祖ノ図アリ、男ヲウヌカナシ、女ヲウメカナシト称ス、」との記述及びその「復開図」に相当すると思われる部分が、多少の差異はあれ「南島雑話前篇」(「名瀬市立奄美博物館所蔵本」及び「東京大学史料編纂所蔵本、すなわちいわゆる「島津家本」等に含まれる)に見られる。また、同じく「奄美史談」の「第一章 上古」の本文中「享保五年竜郷村ノ人竜佐伯之ヲ開墾シ、石碑一基ヲ掘出ス ソノ文字ハ我古代文字ニ似タレドモ、能ク之ヲ解スルモノハナシ、」との記述に該当すると思われる部分分が、同じく前掲の「南島雑話 前篇」及び「南島雑話 後編」に存在する(その拓本の図は、前掲「奄美史談」に採録されている)。

また、特に「典拠」が示されていないが、「奄美史談」に掲載(添付)された「ノロの辞令」は、前掲「南島雑話 後編」及び『日本庶民生活史料集成 第一巻』所収の「南島雑話」(「鹿児島大学付属図書館所蔵本」)に掲載されたものと極似している。ただし「永井龍一氏公刊本」では二点の辞令が錯綜しており、名瀬市史編纂委員会編の『奄美史談・徳之島事情』では、補訂されている。

その他、前掲「南島雑話 前篇」中の「阿良不利」及び「御印加那之」の挿絵と、構図等が非常によく似た挿絵が前掲「奄美史談」には掲載(添付)されている。また、註13で示した「首枷足械之図」もそのとおりである。

一方「南島画譜」との典拠が示されながら、(私自身の努力不足かも知れないが)現時点で「南島雑話」中にそれを見い出せない部分も、皆

無ではない。²⁰しかしながら、前掲書等これまでの幾人もの研究から、本来の「南島雑話」の姿・内容がそのまま完全には伝えられていない可能性が高いと考えられるので、都成氏が見た時点から後一部散逸等してしまった部分に含まれていたとの推測もできよう。或いは逆に、本来の「南島雑話」には含まれていなかったものが、何らかの理由でたまたま都成氏が見た時点で一緒になっていた、と考えることもできるかも知れない。

「南島雑話」という呼称は後世（大正時代以降）の総称であって、多数存在する個々の史料のそれぞれについては、様々な表題が付けられていることは、広く知られたことである。河津梨絵氏の研究では、「雑記下書」（名瀬市立奄美博物館所蔵）と「大崎便覧」（鹿児島県立図書館所蔵）の二つの稿本以外に、「大崎竊覧」や「大崎漫筆」、「南島雑記」や「南島雑誌」、中には「琉球雑話」や「琉球国奇観」等のように、県外の出身者によって名付けられたのではないかと思われるようなものも含めて、約二十種類近くにも及ぶ呼称の写本が存在する²¹。

その中には「南島画譜」というものはないが、前述の考察から、「南島画譜」は総称としての「南島雑話」と（部分的にせよ）一致すると考えて間違いない。既に述べたとおり、実際に、当時の状況から都成氏が「奄美史談」の草稿を作成する際に、「南島雑話」を手にとってその参考の一部とすることは、十分に可能であった（ただし、「大島島岸本」を写したとされる「鹿児島大学附属図書館所蔵本」の方には含まれない部分が、「奄美史談」に「南島画譜」として参照されているという点については、検討の余地がある）。

2 「南島雑話」の著者の確認者は誰か

「南島雑話」の著者が名越左源太であるということを確認し、それがいわゆる「定説」²²となるきっかけとなったのは、既に前掲書等多くの著作物で指摘されているように、都成植義氏の甥（義理の関係ではあるが）の永井亀彦氏（龍一氏の実兄）の手になる「高崎崩の志士 名越左源太翁」（一九三四年）である²³。

ここで、再び「黎明館所蔵本」の中に見られる大変興味深い記述を紹介して見たい。すなわちそれは、第一章の章末「附記」の部分に見られる、「名越左源太某、著ハス所ノ南島画譜ニ開祖ノ圖アリ」という記述である。「南島画譜」が「南島雑話」の構成部分を指す可能性が高いことは既に述べたとおりである。これによると「定説」より四十年程も早く、既に都成氏（及びその周辺の人物も？）はそれを（部分的にせよ）認識していたことがわかる。このことから、都成氏が「南島雑話」の著者が名越左源太であるとの「定説」の（現時点で判明した中で）最古の確認者であると言ってもよいかも知れない（ひよっとすると当時その認識は、ある程度関係者あるいは研究者共通の認識であったのかも知れない）。

一方、この記述は、前掲の「永井龍一氏刊本」及びその翻刻本の『奄美史談・徳之島事情』にはない。また、同じく前掲の「兼子鎮雄」氏寄贈の「鹿児島県立図書館所蔵本」及び「鹿児島大学附属図書館所蔵本」にも、この記述はない。つまり、明治二十年代にはあった記述が、何らかの理由で遅くとも大正四年の段階では消えていることになる。いや、「永井龍一氏刊本」にもその記述が見えないことから、同書中の永井龍一氏自身の「南峰先生の遺稿刊行に就て」の記述から、都成氏の原稿を永井氏が初めて目にして借覧した「明治四十二、三年頃」を、取り敢え

ずの下限としたい（或いは公刊された「奄美史談」の著者自身の緒言に見られる「明治三十三年」まで遡れるかどうか）。ともあれ以上のようなことから、前述の「永井龜彦氏確認説」が「定説」となってしまうたのであろう。

もちろん「黎明館所蔵本」は（おそらく都成氏の草稿ないし原稿からの）写本であるので、この部分は書写を行った石井氏の独自の書き込みである可能性を、完全には否定できないが、ここはその可能性の高さから、敢えて原本著作者の都成氏自身の書き込みに基づくものであると仮定して、論を進めたい。

3 「南島雑話」の著者説はどう変化したか

では何故「名越左源太某、著ハス所ノ南島画譜ニ開祖ノ圖アリ」の記述が消えたのか。私自身の力量不足或いは資料不足等から詳細はわからないが、それを考えるヒントの一つが、前掲の河津梨絵氏の著作の中にある。すなわちそれは、（永井龜彦氏の『高崎崩の志士 名越左源太翁』の発刊の）「それ以前は、『南島雑話附録』の巻冒頭文が、『南島雑話』の著者に関する唯一の手がかりと見られ、これを記した文政11年（1828）に横目に任じられ、翌文政12年（1829）に大島に赴き、文政13年（1830）まで大島に滞在していた人物が『南島雑話』全体の著者と見られていたようである。」との記述である。すなわちその人物とは河津氏自身が指摘されているとおり、ちょうどその時期に「横目」として大島に滞在していた伊藤助左衛門（同書）のことである。さらに同論文中の河津氏の御指摘によって気が付いたことであるが、笹森儀助の『南嶋探検』（一八九四年刊行）中の記述にも注目したい。すなわちそれは「南島雑話」の書名の下の「該書ハ文政十一年鹿兒島藩大島見

聞役ニテ藩主ノ特命ヲ奉シ各村ニ就キ三年間ノ跋涉ヲ經テ取調タル書ナリ」というものであり、これも具体的には「伊藤助左衛門」のことを指すであろう。中でも特に注目したいのは、その発刊年の一八九四年（明治二十七年）という時期である。これはまさしく「奄美史談」の草稿が形成されつつあった時期である。もちろん明治二十七年発行の「南島探検」は非売品であり、ほぼ同時期に都成氏自身がその内容を目にすることができたかどうか確証はないが、既に述べたような島司（笹森氏の前任者ではあるが）と都成氏との係わり等を考えるに、必ずしも難しいことではない。それらの研究に代表される当時の「南島雑話」著者への認識が、「奄美史談」草稿から「名越左源太云々」の文字が削除されることに、微妙な影響を与えたのかも知れない。

そうであるとする、この流れは最近の、「南島雑話」著者としての「名越左源太」一辺倒の評価↓「伊藤助左衛門」重視（再評価）という流れと似通ってもおり、大変おもしろい。

まとめにかえて

「奄美史談」の内容を正しく理解するには、「南島雑話」同様単に一般的な歴史的知識だけでは不可能で、奄美地方の歴史・文化への造詣、とりわけ深い民俗学的知識も必要である。その為なおさらその内容の完全なる理解は筆者自身の手には余る。それ故もあって、本稿は本館所蔵「奄美史談」（写本）の紹介論考としては、甚だ不十分である。また、「南島雑話」との関わりについての考察も、限定的なものに終わってしまった。そのことをまずお詫び申し上げたい。

この点に関連して、冒頭に述べた本館企画展「描かれた奄美」では、

それぞれ関わりのある歴史資料と民俗資料を同時に展示した。このことは、その後の多面的な研究進展の可能性を高めたという点で、結果として非常に意義あるものとなった。具体的に特筆すべきことを述べれば、江戸時代末期の詳細な奄美大島の絵図（「大島古図」と「南島雑話」、同じく江戸時代末期頃の奄美大島の情景を描いた絵巻（「琉球寫真景」）の三つを初めて同時に展示し、さらにそこに描かれた民俗資料を併せて展示して、江戸末期の頃の奄美（大島）の姿をより深く多面的に描き出すことに成果を上げたと言える。（筆者自身の担当の）歴史の立場から言えば、民俗学研究の力を借りることで、奄美史研究における新たな可能性が見いだせ得たのである。今後いつそう期待したい。

先にも述べたとおり、明治二十年代という時期は、奄美史研究の進展上で、非常に意義の大きい時期である。この時期から次の三十年代、さらには大正時代にかけて、複数の研究者が奄美史の解明に情熱を傾けるようになっていった。「南島雑話」ないし「奄美史談」に関わりを持つた都成植義氏や小出満二氏、石井達宗氏や兼子静雄氏、坂口徳太郎氏や伊波普猷氏（沖縄県立図書館長など歴任の研究者）及び昇曙夢氏、そしてもちろん永井龍一・亀彦氏等、多くの研究者たちの活動を窺い知ることがができる。そしてさらに、そこにはお互いの豊かな交友関係が存在し、それがプラスに作用して研究進展を促したであろうことも推測できる。

文献史料上の制約も存在しないわけではないが、今後いつそう「ジャンル」を超えた強い「ネットワーク」を築くことで、奄美史研究の進展が加速することを期待したい。

最後に、本稿及び先の企画展「描かれた奄美」に対して御協力いただいた全ての機関・方々に、遅ればせながら心から感謝の気持ちを表して、

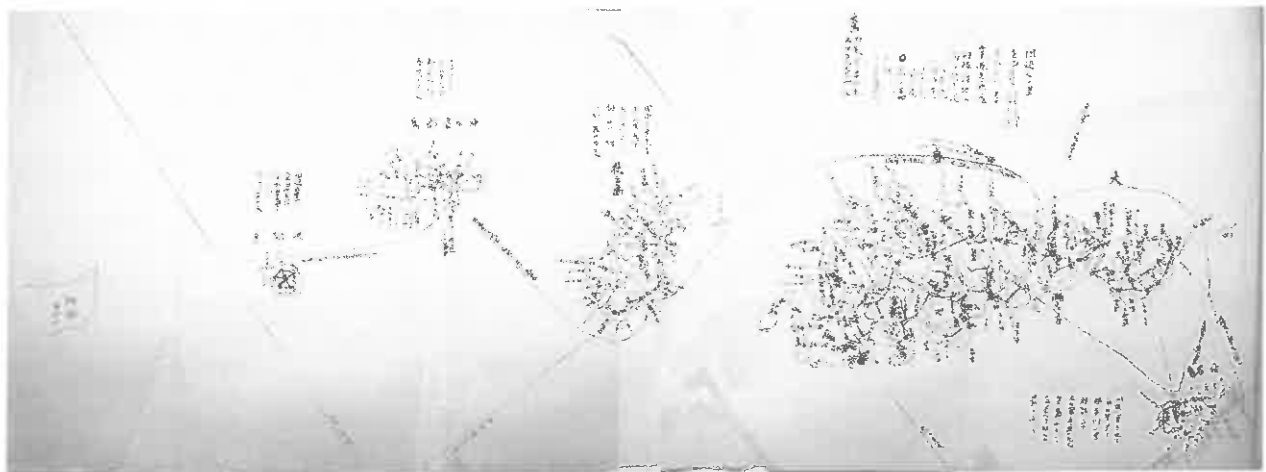
(参考) 黎明館所蔵の「奄美史談」(写本) に掲載(添付)されている
 絵・絵地図の一部



「大島首府金久伊津部全図」



「首枷足械之図」



奄美諸島の地図

〔註〕

- (1) 本企画展の内容等については後でいくらか触れるが、その詳細については、直接黎明館（歴史部門は内倉・民俗部門は川野）までお問い合わせ頂きたい。
- (2) 河津梨絵『南島雑話』の構成と成立背景に関する一考察（沖縄県教育委員会編『史料編集室紀要 第二九号』、二〇〇四年）。
- (3) 原口虎雄「第一編 奄美史談 第二編 南島語及び文学 解題」（名瀬市史編纂委員会『奄美史談・徳之島事情』、一九六四年）等。
- (4) 「南島雑話 解題」（『日本庶民生活史料集成 第一巻』、三一書房、一九六八年）。
- (5) 奄美大島の著名な郷土史研究者弓削政巳氏の御教示等によれば、その中の記述の一部が一般に広く流布する「薩摩藩が島民の系図を取り上げて（意図的に）焼き捨てた」との「俗説」の有力な典拠の一つともなっている。しかしこのことは逆に、「奄美史談」の奄美史研究上における存在感の大きさを示す証左の一つであるとも言えよう。
- なお、この「系図文書焼棄論」に関しては、近刊の石上英一「歴史と素材」（『日本の時代史30 歴史と素材』、吉川弘文館、二〇〇四年）に詳しい。
- (6) 『健児社物語』・『瀧廉太郎小伝』・『伸びゆく姿』等の著作がある。
- (7) 鹿児島高等農林学校の使用した七六枚綴の和製本で、
- (8) カーボン紙のようなものを使用しているようにも見える。例えば前掲（註3）の「奄美史談」刊本の昇曙夢氏による「序」には、（貸与された都成先生の原稿を）「御返しする時に弟に命じて写し取っておいたのが、今猶ほ私の手許に残っている。」とある。なお、ここでは「（先生の）南島史」という表現が使っているが、文脈等から見てこれは「奄美史談」を指すと判断した。
- (9) 同じく前掲（註3）の『奄美史談・徳之島事情』による。
- (10) 註8参照。
- (11) この点に関連して、以前前述の弓削政巳氏が調査を試みられているともおうかがいしたことがある。その進展に期待したい。その奥書に「明治二十九年三月五日（著者南人（ミヤコ）都成植義氏二原本ヲ借ル）鹿児島縣下大隅国大島郡名瀬金久村 第七十九国立銀行大島支店ニテ写之 石井達宗 記ス」とある。なお、「改訂名瀬市誌2巻 歴史編」（一九九六年）によると、明治二十五年十月に、大島で初めての銀行として、大阪七十九国立銀行大島支店が設置されている。また、同書では、その終焉に関しては、「南島探検」以外に、この銀行の名は見あたらないが、多分、一、二年にして引き揚げていったのではないかと思われる。明治四十五年にはその存在すら記憶されていないのである。」と述べられているが、少なくともこの写本が書かれた明治二十九年までは存在したことがわかる。また、『日本史総合年表』（吉川弘文館、二〇〇一年）や『近代日本総合年表』（岩波書店、一九六八年）等によると、明治三十四年四月に第七十九銀

行等が支払停止となつて、大阪から各地へ銀行恐慌が波及したとのことであるので、おそらくこれが奄美から同支店が姿を消す一つの契機になつたのではないかとも思われる。

一方石井達宗氏については、残念ながら記載以上の詳細が得られていない。もしこの人物及び都成氏との関わり等具体的に御存知の方がおられたら、ぜひ御一報いただきたい。都成氏を取り巻く当時の交友関係等も、さらにいくらかでも明らかにできるかも知れない。「大阪七十九国立銀行を引き入れたのは、大海原島司の何らかの配慮があつたと思われる」(前掲『改訂名瀬市誌2巻』)であるとするならば、その銀行の大島支店で(おそらくその関係者であつたのではないかと思われる)石井氏が、「奄美史談」を書写できたとしても少しも不思議ではないのであるが……。

(13) 両者の章名及び章立ては次のとおり。

「永井龍一氏公刊本」

(本文中の記載による)

緒言

第一章 上古

第二章 中古

(大島上古)

第三章 近代

第四章 拾遺

第一 夫役ノ事

第二 租税ノ事

「黎明館所蔵本」

(同上)

緒言

第一章 上古

第二章 無主時代

第三章 豪族時代

第四章 代官時代

第五章 商社時代

拾遺

第一 夫役ノ事

第三 砂糖製出及耕地ノ事

第四 砂糖物品交換之事

第五 羽書ノ事

第六 神事

第七 八月踊ノ事

第八 志知也架麻之事

第九 婚禮

第十 節句

第十一 言語ノ事

第十二 破武ノ事

第二 租税ノ事

第三 砂糖製出及耕地ノ事

事

第四 砂糖物品交換之事

第五 羽書ノ事

第六 八月踊ノ事

第七 志知也架麻之事

第八 言語ノ事

第九 破武ノ事

「永井龍一氏公刊本」にはなくて「黎明館所蔵本」にのみ掲載(添付)されている絵・絵地図は次のとおり(後掲の写真参照)。

「首柳足械之図」(註 この図と非常によく似た図が

「南島雑話」中に見える。)

「大島首府金久伊津部全図」

奄美諸島の地図(標題無し)

(14) 「南島雑話」二(鹿児島大学附属図書館所蔵本)の巻末にその旨の記述あり。

(15) 前掲「奄美史談・徳之島事情」中の「著者略歴」によれば、都成氏が「初等師範学校卒業証書」を授与され名瀬小学校訓導に任命されたのが明治十八年である。

(16) 坂口徳太郎氏が大正十年に著わした「奄美大島史」には、「南島雑話」中の「柏有度の肖像」の図の写真が掲載されている。

その経緯からしても、これこそまさしく幻の「大島島庁本」の一部（の写真）ではないかとも思われるが、「南島雑話」の全ての写本等を確認してはいないので、単なる推察の域を出ていない。この件に関して何か情報をお持ちの方は、お教え願いたい。

- (17) 國分直一・恵良宏校注『南島雑話2』（平凡社 東洋文庫、一九八四年）による。

- (18) 前掲「南島雑話 後篇」の付注には、「永井保管本（註「名瀬市奄美博物館所蔵本」）には石碑拓本のあった形跡があるが、墨で真っ黒に塗りつぶしてある。」とある。

- (19) 前掲『奄美史談・徳之島事情』の「編輯後記」参照。

- (20) 筆者が確認したところでは、「奄美史談」中「第一章 上古」の「南島ノ開祖」の「陰陽二神」の部分と、「第二章 中古」の「東間切清水村ニ東原某ナルモノアリ、先代ヨリ為朝ノ印ナルモノヲ蔵セリ」との部分、は、「南島雑話」中にその「典拠」を見い出せない（単なる努力不足による「見落とし」かも知れないが・・・）。

- (21) 註2参照。

なお、同論文掲載の「一覧表」では、沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館所蔵の写本の題名も取り上げられているが、その一部に「奄美史談前承」とあるのはおもしろい。

- (22) ちなみに、『補訂版 国書総目録 第六卷』（岩波書店、一九九四年）にも記載されていない。

- (23) 例えば二〇〇二年に出版された、『南島雑話の世界 名越左源

太の見た幕末の奄美』（名越護、南日本新聞社）は新聞連載記事をまとめたものであるが、非常にわかりやすい構成・内容で、「南島雑話」研究の優れた入門書ともなっている。この中でもこの説を採用している。

- (24) 同氏は戦後一九四九年に『高崎くづれ 大島遠島録』も出版されており、「名越左源太」及び「南島雑話」研究の進展に、大きく寄与されている。

- (25) 河津氏とは異なり、これは『日本庶民生活史料集成 第一巻』

- (26) （三一書房、一九六八年）所収「南島探検」よりの引用である。時代は下がり既に都成氏は亡くなっているが、前掲の大正十年の『奄美大島史』（坂口徳太郎著）の「奄美大島史研究主要参考書類」のところも注目したい。ここでは「南島画譜」を含む「南島雑話」の説明の部分で、「文政十一年大島見聞役等の取調報告書なり」とある。これも前掲「南島探検」等の影響かも知れない。

- (27) 黎明館では平成十四年度より三年間かけて、「奄美群島歴史資料調査」事業を行った。現地における調査等は「奄美郷土研究会（調査室は、名瀬市立奄美博物館）の方々が中心になって精力的に進めて下さり、大きな成果が得られている。今後その成果の活用が、いつそう期待される。

（本館 学芸専門員）